
けいおん ~奏でる物語~

桜 みずき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けいおん～奏でる物語～

【Zコード】

Z8756Y

【作者名】

桜 みずき

【あらすじ】

朱智遼は自分の容姿にコンプレックスを持つている。尖端恐怖症で伸びっぱなしになりながらも、しつかり手入れをしている長髪と持ち前の童顔ちびっ子で女の子と間違えられる事がある遼はある日、軽音部の部長に半ば強引に軽音部に入れられてしまふ。そこで巻き起こる軽音楽の物語。気まぐれに突つ走ります！

プロローグ！（前書き）

始めての方、始めて！

お久しぶりの方、お久しぶりです！

さて、『けいおん～奏でる物語～』が始まるよ～

みんな一緒に「せえのー！」でアーリーハッピーフルーツ

せえのー！

『Now Thank you!』

ちょー！それEHDでしょー！ー！

しかも、否定されたしー！

ちなみに何て言えば良かったんだろ～

では、本編をお楽しみ下さいー！

プロローグ！

「…………」

血壓に田覚まし時計のアラームが鳴り響く。

俺は重たい瞼を開けようと頑張りながら手探りでうなこ音を消そうと奮闘する。

「……あ……何処だっけ……？」

しかし、田覚まし時計にいつまで経っても触る事が出来ない。

いつもと同じ場所に置いているので、いつもと同じ場所に手を伸ばせばアラームを消せるのにもかかわらず、今日は田覚まし時計に触れる事ができなかつた。

俺はこのままじやつむといので、しうがなくベッドから顔を上げ、枕元を見る。

「あれ？」

やはり、枕元には田覚まし時計がなかつた。ベッドの下を見てやると田覚まし時計が転がつていた。

俺はアラームを消すと、ベッドから降りて血壓を出る。

リビングに向かうと朝ご飯がテーブルの上に並べられていて、キッチンでは力チャ力チャと音を立てながら皿洗いをしている同居人

がいた。

「おはよっ、奈亮」

俺は同居人、水河 奈亮に挨拶をした。

「お、起きた？ 遼もおはよっ」

「うん。おはよっ」

俺達は2LDKの『広い』に分類される家賃7万円のマンションに住んでいる。とは言つてもまだ一週間だけだけど…。本当は俺一人で住むことになつていたが、訳があつて奈亮と一緒に住むことになつた。

まあ、自慢じゃないけど、俺の親は結構な金持ちだつたりするので、毎月12万円の仕送りがある。家賃も奈亮と半分ずつ払つているので実質家賃3万5千という格安だ。

奈亮は皿洗いが終わつたらしく手を拭いてリビングに顔を出す。

「いよいよ今日だな

不意に奈亮が言った。

「今日から高校生かあ…」

だけど意味はわかつた。今日は俺達が入る高校の入学式。

それが俺達の入る高校の名前だ。去年までは『私立桜ヶ丘女子高等学校』だったが、今年度から共学校になつた。理由は良くなは分からぬが、巷では「少子化の問題ではないか」と言われている。

「男子何人いると思う?」

俺は奈亮に聞いてみた。

「さあ? わつかんね」

俺達は席に座り、朝食を取る事にした。

卵焼きに、塩鰯、そしてみそ汁に白いご飯……毎回思つてば、100点の朝食だ。奈亮の料理の腕は本当に凄い。夕食もかなり手間がかかるてるのを作つてくれる。しかも、料理以外の家事も全般やつてのけるものだから、将来は良い主夫になりそうだ。

卵焼きを半分に割つてみると、中は程よく半熟、さらにはチーズも入つていた。

その卵焼きを口にいれる。卵焼きが口の中どろけ、一瞬にして味が口いっぱいに広がる。

「ああ～…もう、成仏していい…」

「お～お～、大袈裟過ぎだ。それに、そこで使つ表現として正しいのは、『昇華していい』だら。成仏じゃもう死んでるや」

奈亮がツッコんでくれた。どうやらシラクマの腕も多少有るようだ。

そんなやり取りをしながら、20分弱奈亮が作った朝食を堪能した。

・・・・・

朝食を終え、自室に戻り桜高の制服を着た。深い紺色のブレザーに学年色の青のネクタイに紺色のズボン。それを身に纏つた俺は姿見に映る自分を見た。

「…………似合わなっ！」

あまりの似合わなさにこいつ叫んでしまった。しかし、似合わない原因は自分の顔にある事は分かっているのでしょうかがないことだ。

髪を切る事を躊躇いながら3年間も伸ばし、腰辺りまで届くようなしつかり手入れのしてあるサラサラな髪。男とは思えない可愛らしい顔。男とは到底思えない線の細い体つきに小さい背。誰がどう見ても男装をしている女子だ。

「はあ……」

俺は溜息を吐きながらスクールバッグを持ち、自室から出た。

自室を出ると奈亮が待っていた。

「遼も用意出来たか

「…………」

「どうした？」

「いや、何でもない……」

奈亮は普通に桜高の制服を着こなしていた。元々背が高く、見た目も人目を引くほどのかつゝよさがある。髪もワックスをかけてい るらしく、かなり決まっている。横を歩くのを躊躇したくなる程のイケメンになっていた。

「やつぱり奈亮ってかっこいいな

俺は少し悪意を込めて言つた。ただ単に奈亮がかっこよく見えるから嫉妬をしているだけだが……。

「やつか？おれは遼が女だつたら良いな～って思つこと結構あるわ。 可愛いし。私服姿なんてまんま女の子にしか見えないし

「なつ……俺は男だ！可愛いとか言われても全然嬉しくねえよ／＼／＼！」

「はつー…そんな顔赤くしちゃつて、本当は嬉しくんじゃねえの？..」

「おっえ…B」とかやめろよ…。気持ち悪い

「やつか？遼とだつたら花があつて良いこと思つた？..」

「奈亮…。それ本気で言つてんなり病院行つてこー

「んじゃ学校行く前に病院行くか

「マジで本気で言つてたのー!~.」

「あはははー嘘だよ嘘ーめり、時間無から行べぞ」

「あ、うん」

俺達は新しい生活の第一歩を踏み出しつづけ……

「うおー.」

奈亮が何故か玄関で躊躇いた。

「空氣を読んで欲しいね。まったく……」

「何故俺はキレられた?」

「自分の胸に聞いてみる」

何はともあれ新しい生活の第一歩は踏み出せたから良じてします
か。奈亮は異様に小心翼へ歩だつたけど……。

プロローグ！（後書き）

次回から原作キャラが出ます！

楽しみにしていて下さい！

ちなみに1週間に1回のペースで更新していきたいと思います！

第一話『入学!』（前書き）

一日連続の投稿！

ふう……期末テストが終わったから気楽にいけて良いですよ～

ああ～…センター試験だるい…

では、本編をお楽しみ下さい！

第一話『入学!』

「入試の時にも思つたけど、やっぱ桜高つてテカイな…」

まだ肌寒さを残す4月の上旬ちょい過ぎ。私立桜ヶ丘高等学校の校門で、目の前に広がる桜高を眺めながら俺は正直な感想を述べた。

「だな。廊下もフローリングだつたし、校舎の中もかなり広かつたしな。さすが私立つて感じだ」

隣にいる奈亮も同意し、俺に繋げて評価の感想を述べた。

「まあ、こんなところで立ち止まってたら入る人の迷惑になるから、敷地内に入ろうか」

「ああ。そうだな」

俺達は桜高の敷地に入ろうと足を動かそうとした瞬間、左から声が聞こえてきた。

「そこの人達どいてえーーー！」

左を向いてみると猪突猛進の如く駆け抜けて来る一人の女子生徒がいた。

奈亮は軽やかに避けたが、俺は反応速度が遅かつたせいでその女子生徒に轢かれてしまった。

「あいた！」

「…つて！」

女子生徒とその場に倒れ、俺は背中を強打し、手に持っていたスクールバッグも少し離れた場所に落としてしまった。

「つてえなー…。おい、大丈夫か？」

俺は背中が痛くて仕方ない体を起き上がらせ、ぶつかってきた女子生徒の心配をする。避けられなかつた俺が悪いしね。

「あわわわ…！だ、大丈夫です！す、すみませんでした！！」

女子生徒に怪我はなく大丈夫だつたらしく、少し焦りながらも、しつかりと頭を下げる謝つてくれた。

「いや、そんな謝んなくていいよ。俺にも落ち度はあつたから

「何でもいいが、遼達の周りにギャラリーが出来ることを忘れんな

「唯^{ゆい}…何やつてんのよ…」

「「えつー!?」

奈亮の発言により少し焦り、周りを見渡して見ると十数人の生徒に囲まれていた。心なしか、大半の生徒は女子で、男子は四、五人しかいなかつた。

そして、目の前にいる女子生徒は顔を真つ赤にして「本当にすみ

ませんでした……」と言ひてメガネをかけた女子生徒と共に桜高へ入つて行つた。

「散々な田に遭つたな

「うさ。ていうか、背中めっちゃ痛え」

「はい

俺は背中の痛みを訴えると、奈亮が手を差し出してくれた。そのまま手を握み、やつの事で立ち上がる事が出来た。

「なつ……」

「遼? ビツレた?

立ち上がり髪を整えようとしたら、髪の毛が背中の半ばから腰辺りまでずたずたになつていた。という事は……。

「そんな……」

「そつか。遼は尖端恐怖症だからハサミを自分で切られるのが怖いんだつたな

「爪楊枝だつて生まれてこの方使つたことねえよー。血廻じ無いけどなー」

「さうだな。血廻にならないな

「こしてもビツレ。こんなこなんつたんじや、もつビツレ

うもだよ……」

俺は自分の髪を見ていると、田頭が熱くなっていた。

「じゃあ、とりあえず髪を結つてみたらどうだ？それで多少は『まかせる』

仕方なく奈亮の案で妥協した。

近くに転がっていたスクールバッグを取り、バッグの中からゴムを取り出し、それで後ろ髪を纏めた。

「どう？」

「うん？ダメだな。これだけ髪が自由の利く縛り方じゃダメだ」

「じゃあ、どうしようと？」

「ポニーテール」

「は？」

「ポニーテールにすれば良いこと思つ」

「出来る訳ねえだろ！恥ずかしいわっ！」

何を言って出すかと思えば……。前から言つてますが俺は男です。そんな女々しい野郎じゃありません！

「でも、そんなどたずたの髪を晒し回すよつね良こと思つ」

「確かに…」

「それにお前なら可愛いし似合つて無いだけビ…」

「だ・か・ら・可愛・いとか言われても全然嬉しくねえよ…」

だが、確かに奈亮の言つ通りなので、俺は渋々髪をポーテールに結うこととした。

髪を少しづつかき上げていき、髪を縛りポーテールにした。

「どう?」

「バツチリ似合つてゐるー。」

「似合つてゐるか似合つて無いかを聞いたんじゃねえよー髪は不自然じゃないかを聞いたんだよー！」

「いめんじめん。大丈夫だよ。跳ねてないから気にすんな

「本当?」

ちよつと信じられないのでもた聞いて詰めたが、奈亮は焦った感じでこう言った。

「つて…やっぱーあと、10分もしない内に入学式前のH.R始まるぞー。」

「マジー?」

時計を見てみると八時半を回っていた。

俺達はクラス分けを急いで眺め、同じ三組だったことを喜びながら教室へ向かった。

・・・・・

あの後、H.Rには間に合ひ、入学式も無事に終えた。そして、今は自己紹介と言うだる~い消化任務なのだが、自己紹介に入る前にあつた席決めでちょっと問題があつた。右隣は奈亮で何の問題も無く、嬉しいことだったのだが、左隣が問題だった。

何の因果か知らないが、左隣は今日の朝に俺にぶつかった女子生徒だった。

「私は『平沢 唯』って言います！」

そして今はその彼女の自己紹介の番だ。名前は『平沢 唯』と言う可愛らしい名前で、良く見えてみると結構可愛い子だつたりする。

「好きなことは家で『ひらり』することです！」（キリッ！）

そして、性格が残念だった。

「（なんだかや顔で言われても…）」

「そ、そう。とってもユニークな趣味をしてるのね…。」

先生も呆れながらそう言った。

「えへへ～。そうですか？」

それなのに平沢さんは褒められてると勘違いして、照れていた。

「それじゃあ次、朱智君。あけちお願いね」

遂に俺にも順番が回ってきた。何故か急に緊張してきたが、俺は立ち上がり勇気を振り絞って声を出した。

「俺は『朱智 遼』です。ここには先週引っ越してきたばかりなので、地元の事を良く知りません。なので、皆さんにいろいろとご迷惑をおかけする事があると思いますが、精一杯頑張りますので、どうかよろしくお願ひします」

しつかり言えた。と、自己紹介の余韻に浸ろうと思つたら隣の平沢から拍手が聞こえてきた。そして、その拍手が何故か教室中に広がつた。恥ずかしさのあまり平沢にチョップをお見舞いした。

「あいた！」

「自己紹介だバー」

俺は小声で平沢に言った。

「遼ちゃん照れてますな～」

「遼ちゃんとか言つたな。女の子っぽいだらう」と言つた。

平沢の発言はスルーして、変な嫌な呼び方を言つから、やめるよ

うと言つた。

「だつて遼ちゃんは遼ちゃんしかないじゃん」

「朱智君？平沢さん？自己紹介が進まないからひょっとその辺にしておいてくれる？」

平沢が意味不明な事を言つた瞬間、先生に注意され、渋々黙る平沢。

「それじゃあ水河君。お願ひね」

奈亮の番がきた。どんな自己紹介をするのかと思い、ワクワクしながら聞いた。

「俺は『水河 奈亮』って言います。特技は料理です」

という味つけない普通な自己紹介をして席に座った。

それから約20分後にクラス40人全員+担任の自己紹介は終わり、桜高第一日目は終わった。

第一話『入学』（後書き）

唯ちゃんの登場です！

本家よりゆるい唯ちゃんになっちゃった気がしますが、そこは愛嬌でカバーということです…

第一話『部活ー』（前書き）

三日連続更新！！

勉強以外にやることが無くて暇ですか？

第一話『部活一』

「うへん…」

桜高に入学してから一週間ほど経つある日、俺は自分の机の上に置いてある入部届と書かれた白い紙をな眺めがら唸っていた。

「なあ、遼は入る部活決まつたか？」

そんな俺に対して奈亮が嫌味とも思える言葉を発してきた。

「見て分かれよ。やりたい部活は今のところ決まってないし、第一にやりたい部活がない」

まあ、俺はそんなこと全く気にしてないので普通な返事を返した。

「だよねえ～。遼ちゃんもそう思ひよね～」

隣で一緒に唸っていた平沢も俺達の話に乗ってきた。基本的に自由な校風の桜高なのでユニークな部活が数多く存在するが、どれも興味をそそらなかつた。そして、元女子校だけあって運動部の方はあまり男子に人気な部活は存在しなかつた。さすがにバスケット部とバド部はあつたが。

「だいたい、オカルト研究会とか、ミステリー研究会とか、UMA研究会とか同じ様なやつがいっぱい在りすぎるし、心霊研究会とか、花火研究会に至つては『夏期限定』とかやる気なさすぎでしょ？」

「それに、文科系の部つてよく分からぬよね？」

「確かにそれもある」

「「「うへん……」「

「ダメだこいつひ……」

一緒にして唸り出した俺達を見て奈亮が頭を抱えた。

「もう言う奈亮は何か部活に入ったのかよ。昨日も俺と一緒に帰つたくせに」

「え? お、俺……?」

俺からの急な反撃に動搖する奈亮。その様子から自分の事は棚に上げていたらしい。

「なんだ。自分の事は棚に上げてたのか…。せっこい男

「うぬせえー。やつしたい事がねえんだよ」

本当に棚に上げていたみたいだ。こじても部活どりするか…。

「「「うへん……」「

「貴方達何三人で唸つてるのよ」

「あ、のぶか和ちゃん」

一人の女子生徒が俺達のところへやって来た。名前は『真鍋まなべ和』

と書く。こつも平沢の近くにいる（まあ、平沢が近付いてるだけな
のだが）ので、もう友達と言える存在になつていて。

「いやあ、」

「それが」

「ねえ」

「貴方達普通に喋りなさい」

真鍋が多少呆れて書く。ちなみに、「いやあ、」は俺、「それが」
は奈亮、「ねえ」は平沢が書いた。

「実は、私も遼ちゃんも奈央ちゃんもどこの部活部活に入るか決まって
なく「えー? まだ決めて無かったのー? もう学校始まって一週間が
経つわよー?」

平沢が話している途中で俺達は真鍋に怒られてしまった。

「でもでも私達、運動音痴だし、文科系のクラブだつてよく分から
らなーいし…」

「おい平沢。それじゃあ俺達も運動音痴つて事になつてるや

「はあ…。」しづかで二一トーが出来上がりつていぐのね…」

「…」「…」部活やつてないだけで二一トーー? 「」

衝撃的な事を言われ、俺達は声を揃えてそう書いた。そして、俺

はそろそろ本当に危ないんじゃなかと思つてました。

「奈亮と遼の事情は知らないけど、唯は一度も部活したことなかつたんだから

俺も中学の頃は何もしなかつたのだが、この際どうでもいい。

「奈亮、俺達本氣で考えなきゃまずくなつてきてないか?」

「やうだな。少なくとも平沢よりは早く決めないとな

俺達は真鍋や平沢に聞こえない様に小声でそんなやり取りをした。

・・・・・

昼休み。俺、奈亮、平沢、真鍋は四人仲良く昼ご飯を食べていた。

「という訳で、軽音部つてどこに入つてみました!」

そんな中、平沢が不意にそんなことを言つた。

「やうなんだ…」

俺は少し焦りながら言つ。

でも、平沢に楽器なんて出来るのだろうか?

それにしても平沢がバンドかあ。ギター持つた平沢つていいな。

「それで、軽音部つてどんな事をするの?」

真鍋の質問に対しても唯は、

「さあ？」

「つておい！知らないんかい！軽音部つてバンドやる部活だよーしかしも、軽音部は確かギタリスト募集してたぞー？」

軽音部がギタリストを募集してたから、ギターを持つてる平沢を想像して「かつこいいな～」と思つてしまつた俺が馬鹿馬鹿しく思えた。

「ええー！？でも、私ギターなんて弾けないよ？」

「じゃあ、何なら弾けるのよ…」

「…………カ、カスタネット？」

リズム良くカスタネットを叩いている平沢を想像してみる。

「うんたん うんたん」と、楽しくリズムを刻みながら笑顔でカスタネットを叩く平沢……。

「…………凄く似合つた（わ）」

真鍋と奈亮も同じくそういった。俺と同じくカスタネットを叩いている平沢を想像したのだろう。

そんな俺達の冷やかしに平沢は「そう？照れちやうなあ～」と言

つていた。それを見て俺達は、

「　「　「はあ…」」

と、溜め息を吐くしかなかつた。

結局平沢は軽音部を退部する事を決め、放課後に軽音部の人達に伝えに行くらしい。

第一話『部活一』（後書き）

ちょっと短くなってしまったすみません……

次回は長くなる様に頑張ってみます！

第二話「退部一」（前書き）

情報処理の時間にかきかきして、やっと更新できました！

昨日、更新したかったんですけどね…

第二話「退部」

「さて、放課後になつたし、一緒に帰るか」

「うん」

先程、数学とか書ついの世界最大重要教科の授業から解放され、放課後になつた。奈亮からの誘いに俺は頷き、颯爽と爽快に教室を出ようとした。

「遼ちゃんー奈ちゃん！助けてえー！」

そんな俺達を引き止めようと小走りでこちらへ来る平沢。そんな光景を見た俺は直感的だが、嫌な予感がした。

「うえ？」

その予感が的中し、平沢は机の脚に躊躇、そのまま倒れそうになつた。

「おひとひ…」

そして、ケンケンの要領で足元を見てバランスをとりながら俺達に寄つて来る。

「うとひとひてー！うえー？」

「はー？」

田の前で止まると思っていた俺だが、その勢いは止まることなく、

予想に反して俺に突撃してきた。

「あいてー！」

「ぐふつー。」

咄嗟に避けようとしたが、コンマ一秒の世界で人間が動ける訳がない、俺と平沢は激突した。入学式にもこんな事があつたなの心の隅で思いながら俺はその場に倒れた。

「うー、こめんねつー？遼ちゃん大丈夫ー？」

平沢が俺を気にかけ言葉をかけるが、当の本人である俺は後頭部を強打し、軽く脳震盪を起こしていた。

「あー…大丈夫に見えるなら眼科へ行つたほうがいい…」

俺は少し悪意を込めていつたが、平沢本人は少し驚き気味に「え？じゃあ、帰りに眼科寄らなきやー」と言つていた。…いい加減こいつぶん殴つて良いかなあ？

「ほら、本当に大丈夫か？」

奈亮が手を出してくれた。未だにぐらんぐらん揺れる頭を押されながら、無言で奈亮の手を掴んだ。すると、奈亮が手を引き、俺を立ち上がらせる。

「うあ…目眩がする…」

立つてみると大分楽になつたが、目眩がひどく、気持ち悪い。

「ホントに」「めんね……！遼ちゃん死んじゃやだよお……」

「勝手に人を殺すな！」と言いたかったが、いまはそんなことどうでもいいくらいに頭が痛かつた。だが、平沢は半ば本気で涙目になつてるので俺は平沢に優しく声をかける事にした。

「大丈夫じゃないけど、あんまり心配しなくていいよ。避けられなかつた俺が悪いし……。というか、何か用があつたんじゃないの？」

入学式の時も俺が譲歩したが、俺って実は押しに凄く弱いのか？そんなことを思いながら俺は話を切り替えた。

「うん、そうなんだけど……遼ちゃん本当に大丈夫？」

未だに平沢は心配していた。このままじやラチがあかないので、

「もう大丈夫だよ」

といつ事にした。

「なら良いんだけど……」

だが、平沢はまだ納得いかない様子だった。

「大丈夫、大丈夫だから」

俺が念を押すと、

「本当に？」

と言つてくる。平沢は意外と心配性らしい。といふか、ついさつき俺が大丈夫だと思つてたじやないか。どういう風の吹き回しまわしだよ…。

「ホントホント。もう大丈夫だつて」

「なら良かつた」

やつと平沢が笑顔になつてくれた。なんか、平沢はいつも無邪気な笑顔で笑つてるから、その顔を悲しみの色に変わるのは何故か嫌な気分になる。物凄い罪悪感が生まれるのだ。

そして、気が付くと頭の痛みも消えていた。

「で? なんの用だよ」

というか、帰ろうとしていたところを呼び止められているので実際は早く帰りたいのが本音な訳で、用があるならさっさと済ませてしまいたい。

大体は想像出来るが…

「じ、実は…軽音部の人達に「退部します」って一人で言つるのが怖くて…。だから、一緒について来て欲しいなあ～って…」

平沢が両手の人差し指同士を付けながら少し上目遣いに言つてくれる。感想を言うと凄く可愛かった。まあ、本人には言わないけど。

「俺はいいけど、奈亮はどうする?」

でもまあ、友達の頼みを断るような心の狭い奴では無いので、平沢の頼みに頷く。

「いや、俺は夕飯の買い物したり洗濯したりで忙しいから無理だな

「そつかあ…残念…」

「じゃあ、俺は先帰るぞ」

「うそ」

俺は奈亮を見送ると、平沢と一緒に軽音部の部室である音楽室へ向づけた。

「えじや、行くか」

「うそー。」

・・・・・・・・・・

「うそー怖こよが…」

「あのなあ平沢、歩き難い事この上ないんだけど…」

今は音楽室へ向づけに通る事になるこのオカルト研究会やらGMA研究会やらの色々とそれ関連の部室が連なる廊下にいるのだが、どうやら平沢はそれらが怖いらしく、俺に抱き着きながら覚束ない足取りで進む。

「だつてえ……」

「はあ……」

俺はいつこりに離れようとしない平沢に対し、溜め息が出た。この状況は嬉しいんだが、実を言つと俺も内心かなり怖がつてたりする。

「ほら、後は階段上がるだけだからいい加減離れろ」

「もう少しのままで」

急に機嫌を良くし、俺の頭を撫でだした。いや、いいんだけど、絶対に人に見られたくない絵だったりする。

「あ、貴方達…仲良いのね…」

「あ、いや…これは…」

「あ、先生だ」

今、この状況を音楽の山中先生やまなかに見られてしまった。

「音楽室へ行くの?」

「はい」

「俺はここへの付き添いです」

「そりゃ、音楽室はここを上がってすぐだから。あと、くれぐれも校内でそんなことしない様にね…」

山中先生はそう言つと階段を下りていつた。

「ほら行ぐぞ

「ルニ！」

平沢はやつと俺から離れてくれた。

階段を上がり、音楽室の前に来ると平沢は少し浅く深呼吸をした。

「ひう・みしき」

そう言って音楽室のドアに手をかけようとしたが、何故かその手を止めた。

「あわわわわわわわ…」

すると、何故か困惑したかの様に声を上げる。いや、困惑してるのか…。

「どうした平沢？」

גָּמְנִיתַן ... ג

平沢がそう言つた瞬間、うしろからやつて来た女子生徒が平沢の肩をポンと叩いた。

「ひいいい！」

何故か平沢は大声をで叫び、この世の絶望でも見たかの様な涙目になり、「違います違います違います……」と息継ぎをせずに何度も言つていた。

そんな平沢を見て俺はこいつ思った。

「（平沢って肺活量凄いな）」

「あ、天然でテンポが悪くて使えないドジつ娘！」

女子生徒は平沢の顔を見るなり物凄く失礼な事を言つた。否定はしないけど……。

「あーもしかして貴女が入部希望の平沢 唯さん？」

「えー？ は、はい！ そ、そうですー！」

実際は退部希望だけだ。

「そつかあー色々と誤解してごめんねーギター物凄く上手いんだってねー来てくれるの待つてたよーーー！」

平沢に在らぬ尾びれがついていた。

「君も？」

「いや、俺は「入部希望ー？」ホントにー？やつたあーこれで数が揃つたよー」「…………ねー」

俺はこの女子生徒のマシンガントークについていけなかつた。

「みんな！入部希望者が来たぞ！しかも一人もだ！」

女子生徒は音楽室のドアを勢い良く開けるや否や、笑顔で音楽室にいた女子生徒一人にそう言った。

「本当に…？」

「まあ！」

女子生徒一人は目を輝かせ、こちらへ顔を向ける。

「歓迎しますわ～！」

歓迎されてしまった。

「ムギ、お茶の用意だ！」

「はいー。」

ムギと呼ばれた女子生徒は多少の急ぎ足でティーセットの置いてある机へ向かった。

「ほら、二人とも座つて座つて…。」

突然な事にポカンとしている俺達を音楽室の窓際近くにある席に座らせられ、目の前に紅茶とケーキが置かれた。

「（こ）は本当に軽音部なのか？」

俺は心の中でそう思つた。本当に平沢が退部宣言が出来るのか

心の底から心配になつて來た。

第三話「退部一」（後書き）

だんだん遼くんの言葉遣いが丸くなってきた？

男の人の口調つて難しいです..

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8756y/>

けいおん ~奏でる物語~

2011年11月30日11時55分発行